令和五年度　入学試験問題（2期）

国語総合・現代文B

第1問

次の文章を読んで、後の問（問一～問六）に答えよ。

「危機の時代」とは古き時代が崩れ落ち、新しき時代が産声をあげる歴史の大転換期である。滅びゆく古き時代は、誰の目にも明白になっている。それは重化学工業を基軸とした工業社会である。

もちろん、産声をあげようとしている新しき時代がどのようなものなのかは、誰にもわからない。しかし、ア新しき時代とは工業社会よりも、より人間的な時代となっている必要がある。

人間の欲求には「所有欲求」と「存在欲求」がある。「所有欲求」とは外在する物資を所有したいという欲求である。「存在欲求」とは人間と人間が調和する、さらには人間と自然とが調和することによって充足される欲求である。すなわち、「分かち合い」によって充足される欲求だといってもよい。

人間は「所有欲求」を充足すると、「豊かさ」を実感する。人間は「存在欲求」を充足すると、「幸福」を実感する。人生を振り返れば、「幸福」は親との触れ合い、愛する者との触れ合いなど、人間と人間が触れ合い、「分かち合い」のうちに実感していることがわかるはずである。

工業社会とは「存在欲求」を犠牲にして、「所有欲求」を追求してきた時代である。欠乏という人間社会の課題に取り組まなければならなかったのである。

（注1）ポスト工業社会とは、工業社会が犠牲にしてきた「存在欲求」が充足されることを追求できる社会となる必要がある。つまり、人間の人間的な欲求である「存在欲求」そのものを追求できる社会が、ポスト工業社会なのである。

ポスト工業社会の動きは既に始まっている。日本における産業別就業者の推移をみれば、サービス業の就業者が一貫して増加し、一九九〇年代の後半から、トップに君臨している。これに対して農業とともに製造業の従事者は大幅に減ってきている。もっとも、日本は工業社会からの転換が遅れているので、農業の就業者は一貫して減少していくが、一九七〇年代の前半まで製造業の就業者は増加傾向をたどっている。

ポスト工業社会への転換の遅れている日本をみても、脱工業社会への波は打ち寄せている。しかも、サービス業は増加しているが、卸売・小売業、飲食業などという伝統的な第三次産業は頭打ち傾向にある。増加しているサービス業の従事者は、専門職や技術職といわれる産業の従事者である。つまり、弁護士などの法律家、会計士や経営コンサルタント、設計士やデザイナー、プログラマーなどの情報処理技術者、これに医師、看護師、療法士などの医療従事者に、保育士、介護福祉士、ソーシャルワーカーなどの福祉関係者が加わっている。

しかも、製造業においても専門性を要求される技術者、企画管理者の比重が急速に高まっている。つまり、知識が要求される職務が急速に増加しているのである。

経済とは人間が自然に働きかけて、自然から人間にとって必要不可欠な有用物を取り出す活動であると捉えることができる。そう考えると、いかなる時代の経済活動においても、人間は自然に存在する物量に、知識を加えて生産活動を営んできた。

鉄の矢尻を鉄鉱石から製造する時にも、自然に存在する物量に、知識量を加えるようにして製造する。しかし、鉄の矢尻を製造する時よりも、心臓の（注2）ペースメーカーを製造する時のほうが、自然に存在する物量に加える知識量は、飛躍的に増加することになる。

ポスト工業社会とは知識社会ということができる。もちろん、知識社会になったからといって、物づくりが姿を消すわけではない。経済とは人間が自然に働きかけて、人間にとっての有用物をつくり出すことだからである。

しかし、ポスト工業社会である知識社会では、人間の知識や知恵というオブラートで包んで、有用物をつくり出す。そ

のため高い人間的能力を必要とする職務が急増し、イ知識産業が産業構造の基軸を形成するようになる。

確かに、重化学工業を基軸とする工業社会は大量生産・大量消費を実現して、飢餓的貧困の恐怖を解消した。しかし、その代償として単純労働という人間の非人間的使用方法に忍従しなければならなかったのである。

ところが、飢餓的貧困の恐怖から解放され、人間の生存に必要不可欠な基礎的ニーズが充足されてしまうと、より高次な欲求が芽生えてくる。つまり、生理的欲求や安全欲求という低次な欲求が安定的に充足されると、社会的欲求、自我欲求、自己実現欲求という高次な欲求が生じてくることになる。それは前述した表現を使用すれば、「所有欲求」を充足するために犠牲にしていた「存在欲求」を追求するようになると言い換えてもよい。

低次な欲求が充足されていない時であれば、賃金という「飴」と貧困や失業を「鞭」として、単純労働という非人間的使用方法へと駆り立てることができた。しかし、高次な欲求が芽生えてくれば、人間の人間的使用方法を可能にする社会へ舵を切る必要がある。それが人間社会の進歩である。

しかも、重化学工業による大量生産・大量消費は、こうした供給面で行き詰まるというだけでなく、人間の生活様式が変化するため、需要面でも困難に逢着する。大量生産・大量消費は、標準化され、画一化された生産物を大量に消費するために、同様に標準化され、画一化された生活様式を前提とする。

ところが、高次な欲求が芽生え、「量」から「質」への転換が始まる。つまり、大量生産・大量消費によって、人間の生存に必要不可欠な基本的ニーズが充足されてしまうと、人間はより清潔なもの、より美しいもの、より優雅なものなどを求めるようになる。

そうなると、消費財の需要は多様化する。大量消費を支えてきた画一的な需要が多様化すれば、大量生産・大量消費から、多様な需要に対応した多品種少量生産へと移行せざるをえなくなる。もちろん、単純労働化した部分労働では、多品種少量生産への対応は困難になる。

「量」を「質」に変換するのは知恵であり、知識であることを忘れてはならない。それは人間の人間的使用方法が追求

されることだといってもよい。

大量生産・大量消費を実現した工業社会の最大の制約条件は、X である。経済とは自然を変換させることにほかならない。大量生産・大量消費とは自然資源多消費型産業が形成されているということを意味する。このまま大量生産・大量消費をつづけていけば、自然が持続可能ではないことに誰もが気づき始めている。「量」を「質」に置き換えることは、人間と自然との最適な質量変換を追求することをも意味しているのである。

もちろん、自然に存在する物量に対して、追加する知識量を飛躍的に増加させれば、当然のことながら自然に存在する物量の使用は、飛躍的に節約される。いうまでもなく「量」が「質」に置き換えられれば、耐久性は向上する。使い易(やす)くなるばかりか、修理も容易となって、使用期間は長期化するからである。

そればかりではなく、大量生産・大量消費のもとでは生産の場と、生活の場、すなわち消費の場が離れているために、膨大な無駄が生じる。ところが、情報は生産の場と、消費の場を急激に近づける。つまり、あたかも注文方式のように、需要のあるもののみに限定して供給することができ、多様な需要に対応して、無駄のない多様な生産が可能になるのである。

知識産業を基軸とする知識社会が形成されるからといって、農業や工業が消滅するわけではない。人間は自然に働きかけ、人間の生存にとって必要不可欠な有用物を入手しなければならないからである。

自然に働きかけるといっても、その自然は生命ある生きた自然との接触であるといってよい。

生命体をつくる有機物を創造できるのは、葉緑素のある緑色植物だけである。緑色植物は葉緑素によって太陽エネルギーを捉え、水と二酸化炭素から、光合成によって有機物を生成する生産者である。それ以外の生物は、食物連鎖で結びついている消費者にすぎないのである。

もちろん、人間も消費者である。機械さえあれば、生命さえも生産できるという考えは人間の傲慢な思い上がりである。生命ある自然との接触なしには、人間の社会の発展はありえない。大地への働きかけである農業は、人間の最も根源的な営みである。

それ故に大地への耕作（cultivation）は、文化（culture）を意味する。緑なす耕作地を未来の世代に残さなければ、人類の発展はありえない。それは人類の文化の継承が、人類の歓喜と義務であるからにほかならないからである。

工業は人間の根源的営みである農業の周辺から誕生する。糸を紡ぎ、機を織る繊維産業が農家の副業に起源のあることを想起すれば、それは容易に理解できるはずである。農業が生きた自然を原材料とするのに対して、農業の周辺から誕生した工業は死んだ自然を原材料とする産業なのである。

知識産業も工業の周辺から誕生する。機械に働きかける単純労働を包み込んだ工業の周辺で、企画や管理などの業務が拡大していくことから、知識産業が形成されていく。農業では、直接働きかける対象が自然であるのに対して、工業では直接働きかける対象が人間の創造した機械となる。これに対して知識産業では働きかける対象が、人間と人間の関係になる。

知識社会の産業構造は、［　　Y　　］ことになることを理解したほうがよい。つまり、知識産業が基軸となる知識社会になっても、農業や工業が消滅するわけではない。

もっとも、知識社会になると、農業にも工業にも、表層を被（おお）う知識産業の論理が浸透していく。それは工業社会で工業の論理が農業にも浸透していくことと同様である。ウ

工業では人間が自然に働きかけるために創造した手段が、決定的意義をもつ。農業では働きかける対象としての自然そのものが、決定的意義をもつ。ところが、工業社会になると、農業においても工業のように、機械とコンクリートの大量投下によって人間が創造した手段が重視されてしまう。そのため農業でも工業のように、機械とコンクリートを投下すれば、生産が拡大すると観念され、自然そのものの肥沃度をかえって劣化させてしまう場合すらある。

ところが、知識社会になると、知識産業の論理が農業にも適用される。知識産業では対象とする人間への理解を深めて知識を生産するように、農業でも対象とする自然への理解を深めて、自然に知識を投入して自然の肥沃度を高めようとする。つまり、知識集約農業が展開することになる。

（神野直彦（じんのなおひこ）著『「分かち合い」の経済学』に基づく）

（注）1　ポスト……他の語の上に付いて、「次の」「後の」の意を表す。
2　ペースメーカー……心臓の拍動を補助する装置。体の中に埋め込んで使用する。

問一　傍線部ア「新しき時代とは工業社会よりも、より人間的な時代となっている必要がある」とあるが、「より人間的」になるとはどういうことか。適切なものを次の①～⑥の中から二つ選べ。ただし、順序は問わない。
解答欄は、ア・イ。

① 人間にとっての有用物をつくり出す生産活動において、専門性や技術力が求められ、知識や知恵の果たす役割が大きくなること。
② 生産と消費の場の距離が縮まることで情報伝達が容易になり、耐久性の高い製品を生み出す産業が形成できるようになること。
③ 人々の多様なニーズを満たすべく、標準化および画一化された大量生産を行うことにより、豊かな生活様式を実現できるようになること。
④ 人々が多くの消費財を所有、蓄積することよりも、人類の根源的営みである大地の耕作という文化の継承に喜びを見いだすことができるようになること。
⑤ 生命維持のために必要不可欠なニーズが満たされることで芽生える、社会的欲求や自我欲求などのより高次な欲求を追求できるようになること。
⑥ 標準化された知識の詰め込みではなく、知識を活かして備わった能力を向上させるような教育サービスが提供されるようになること。

問二　傍線部イ「知識産業」に関する説明として不適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ウ。

① 工業社会で求められてきた「量」の追求から知識による「質」の追求という、「量」から「質」への転換を担うのが知識産業である。

② 知識産業には、経済活動と自然との最適な質量変換を追い求め、再生可能エネルギーによって工業社会の限界を克服することが期待されている。

③ 知識社会の基軸を成す知識産業では、働きかける対象である人間と人間の関係が、知識の生産において決定的な意義をもつことになる。

④ 工業において知識が要求される職務が拡大していったことが、その周辺における知識産業の形成につながったと言える。

問三　空欄 X に入る最も適切な言葉を、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、エ。

① 要求
② 賃金
③ 知識
④ 環境

問四　空欄 Y に入る最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、オ。

① 中核に知識社会を牽引（けんいん）する知識産業、その周辺に工業が存在し、表層を大地への働きかけである農業が被（おお）う
② 中核に農業があり、その周辺を工業が取り巻き、表層を金融・保険業といった伝統的産業が被う
③ 中核に基幹となる知識産業が存在し、その周辺に単純労働を包み込んだ工業、表層を根源的営みである農業が被う
④ 中核に生ける自然に直接働きかける農業があり、その周辺に工業が存在し、表層を知識産業が被う

問五　傍線部ウ「工業の論理が農業にも浸透していく」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、カ。

① 対象である自然について学び、専門的な知識を注ぎ込むことで、農業の生産性を高められるようになること。
② 農業の機械化によって人間の労働が機械に従属するようになり、知識集約農業を展開するようになること。
③ 人間がつくり出した機械を用いれば、自然との接触がなくても生きた自然を生産できると考えるようになること。
④ 自然に働きかける手段である機械を農業に積極的に投入することで、農作物の生産拡大を図るようになること。

問六　本文の内容と合致するものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。ただし、順序は問わない。

解答欄は、キ・ク。

① 人々の高次な欲求がもたらす需要の多様化に対応するためには、知識社会においても、大量生産・大量消費を支えるしくみが必要である。

② 加える知識量の多寡はあるが、人間はいかなる時代においても自然を変換し、生存にとって必要不可欠な有用物を手に入れる活動を営んできた。

③ 農業では働きかける対象である自然が生産にとって決定的な意義をもつのに対して、工業では自然に働きかけるために人間が創造した手段である機械が生産において重視される。

④ 工業社会では、機械に直接働きかける単純労働と組織の維持に携わる管理労働との間で、労働の二極分化が進展し、問題視されていった。

⑤ 日本はポスト工業社会からの転換が遅れたものの、脱工業社会は目前に迫ってきており、情報社会を軸とする新たな時代が産声をあげようとしている。

⑥ 工業社会から知識社会へ産業構造を転換していくためには、従来のような機械設備に対する投資ではなく、知識産業への投資を積極的に行わなければならない。

第2問　次の文章を読んで、後の問（問一～問五）に答えよ。

理想の旅のかたちとは、ガイドブックを持たずに、自由に歩く旅だろうか。ガイドブックに書かれた内容を追体験する旅行は、ガイドブックを持たない旅と比較すると、常に貧しく、真正なもの（the authentic）と出会えないのだろうか。こうした[ア]「ガイドブック不要論」は、ガイドブックに対する批判で繰り返されてきた。

ガイドブックの歴史は古い。たとえばエルサレム、ローマと並ぶキリスト教の三大聖地として九世紀に現れた、イベリア半島北西部のサンティアゴ・デ・コンポステーラへ向かう巡礼の旅には、『サンティヤーゴ巡礼案内書』というガイドブックが大きな役割を果たしていた。また江戸時代の（注1）「名所図会（めいしょずえ）」や『旅行用心集』をはじめ、日本にもガイドブックの長い伝統がある。つまりガイドブックを頼りに旅立つことは、近代観光に特殊な、新しい行動ではない。

A　ガイドブックの記述を追体験することが、問題なのだろうか。数々の「名所図会」の始祖と目される『都名所図会』の続編である『拾遺都名所図会』巻之二（一七八七年）には、「案内者」が図会を片手に「名どころ」を紹介している画がある。そこで案内を受けている旅行者は、眼鏡を手に身を乗り出して、図会を覗（のぞ）き込んでいる様子が描かれている。ガイドブックを読みつつ名所を見て回る旅は、決して新しい体験ではないのである。旅におけるガイドブックは眼鏡であり、『都名所図会』がユーモアを交えて描いたように、それはよく見るための道具である。そして「見る」ことは「理解する（I see）」ことへ、つなげることができる。

かつて松尾芭蕉（ばしょう）は、西行法師の旅に憧れて陸奥（みちのく）へ旅立ち、のちに『おくのほそ道』（一七〇二年）に結実する旅をした。その芭蕉の旅は、与謝蕪村（よさぶそん）を旅枕へ誘い、小林一茶にも影響を与えた。さらに多くの有名無名の旅人たちが、そうした先人たちの旅に憧れて、旅立っていったことだろう。ガイドブックや紀行記に刺激されて旅立つこと、さらには旅の道筋を真似（まね）て歩き回ることは、小田実（まこと）『何でも見てやろう』や沢木耕太郎『深夜特急』や「地球の歩き方」を読んで旅立った若者たちに限った近代の体験ではないのである。

西行や芭蕉を小田や沢木と同列に語ることは、いささか乱暴な議論かもしれない。しかし旅立つ動機の一つに真似があり、追体験があること、そして先人の旅に思いを馳せながら、ときに旅先でもガイドブックや紀行記を読みつつ旅することは、旅行の歴史において決して珍しくない、むしろ古くからおこなわれてきた旅のかたちであったことは、重要である。なぜなら旅は、それが独り旅であっても、決して単独でおこなわれるものではないからである。先人の旅を真似て旅立つ人は、先人の「見る」ことを土台にして、そこから新たな「見る」ことを体験するだろう。いいかえれば、どれだけ精緻に真似て、また追体験しようと試みても、旅する時間と空間が異なれば、そして旅する主体が異なるのだから、きっと異なる旅の体験が待っている。

それを「見る」ことで自分がしている旅を意識できるならば、それは新しい「見る」ことへとつながる。そうして先人の旅行記が次の世代の旅行記へとつながり、さらに新たな「見る」ことが生まれて、新たな旅行のかたちが広まっていく。それは中世の巡礼の旅や、近世の俳人たちの旅にも観察でき、また小田実の『何でも見てやろう』が沢木耕太郎や「地球の歩き方」の創刊メンバーの旅心を刺激し、さらに沢木の『深夜特急』や「地球の歩き方」が、次の世代が追体験した海外旅行のかたちを生み出したように。いわば真似と追体験を推進力にして循環して生成していった足跡が旅行の歴史であり、それは人類の文化を形作る重要な歴史的過程の一部でもある。

こうして文化が生み出されていく回路の一つとして旅行の歴史に注目するとき、一人の作者が書いた紀行記とは異なる方法で、しかしそれに劣らぬ推進力を供給してきたのが、ガイドブックというメディアである。B 改訂を繰り返して記述を更新していくガイドブック・シリーズは、その時々の出発地と目的地の文化を誌面上に色濃く反映させるだけでなく、新たな真似と追体験のきっかけを生み出し、多くの人々へ提供していく。そうして新たな文化を醸成する可能性を有する点において、ガイドブックは極めて特殊なメディアである。

ガイドブックを持って旅する人々のうち、その誌上で紹介されているルートや地点をそっくりそのまま追体験しようとする人は、むしろ少数派だろう。多くの人はガイドブックから情報を選び、それぞれの旅行に応じた利用をするものと考

えられる。

だが他方で、ガイドブックに掲載されていない地方や旧跡ばかりを探し出して巡る人も、また少ないだろう。とくに海外旅行では、ガイドブックの記述が、実質的に旅行者が入手する最大限の情報となり、現地でガイドを雇うか知人でもいない限り、ガイドブックの外部を想像して歩くことは稀有だろう。存在さえ知らない、有るかどうかさえ意識化されていない場所へ、人は向かうことはできない。するとガイドブックというメディアは、旅行者の体験を全的に縛らないが、しかしその視野の枠組みを構成し規定する、重要な情報源であるといえる。

ガイドブック・シリーズの多くは、読者から寄せられた数多の投稿を情報源として活用することで、掲載内容を拡充させてきた。それは五〇年代に創刊したフロンマーの『ヨーロッパ一日五ドルの旅』と同書の日本語版を嚆矢として、七〇年代の「地球の歩き方」やミニコミ誌『オデッセイ』、九〇年代の雑誌『旅行人』などがあり、とくに初期の「地球の歩き方」は「投稿が投稿を呼ぶ」メディア循環を巻き起こして、改訂するたびに多くの読者を得てきた。

読者の投稿を情報源として活用するメディアは、それがうまく循環していけば読者コミュニティを醸成し、独自の文化圏を創り出すことができる。これは海外旅行のガイドブックに限らず、ラジオ深夜放送や文芸雑誌などでも観察できるメディア循環の特徴であり、また読者投稿を掲載しない「ロンリー・プラネット」シリーズも、インターネット上の公式サイトでは、投稿をもとにしたコミュニティの形成に取り組んでいる。

ただしフロンマーのシリーズも「地球の歩き方」も、ある時期から読者投稿に対する態度を変化させ、掲載する投稿の数を減らし、また本文に吸収するなどして、イ投稿記事を周縁化させていった。その理由は異なるが、しかし結果として投稿記事を誌面から消していく一方、「買い・食い」中心の消費情報を増やしたことで、かつて「投稿が投稿を呼ぶ」ことで推進力を得ていたガイドブックは、制作者から読者へ一方的に観光情報を提供するマス・メディアに変質し、旅先の日常生活から脱文脈化していく孤人旅行を広めている。

C 投稿には誤った情報や、真偽の判断が難しいもの、自己宣伝に等しいものも含まれるため、発行部数が多くな

るほど情報の正確さが求められ、社会的責任が大きくなる人気のガイドブック・シリーズでは、その扱いが難しくなる。しかし現在のガイドブックが、そうして失った「投稿が投稿を呼ぶ」メディア循環の回路に取って代わる、新たな推進力を得たようには見えない。かつて「読むだけでも面白い」とさえ評された初期の「地球の歩き方」のようなガイドブックが消え、今ではほとんどのガイドブック・シリーズが、より薄く・軽く・安くなる方向へ競争している。そうして「買い・食い」の消費情報ばかり掲載する、画一化された現在のガイドブックは、定期更新される有料のカタログにも見えてしまうのだ。

旅することの魅力や旅先の文化を未だ見ぬ人々へ伝える役割、そして先人の旅のかたちを伝えて真似や追体験の回路となる機能を、現代日本のガイドブックは捨て去ってしまったのだろうか。たしかにガイドブックは商業出版物でもあるが、それは文化を醸成するメディアでもある。そして優れたガイドブックは、未来において第一級の史料にもなる。

改訂を繰り返す近代的ガイドブックの祖形は、ドイツのカール・ベデカーとイギリスのジョン・マレーが一八二〇年代から三〇年代にかけてそれぞれ出版した「旅行者のための手引書」と目されている。前者は正確な地図と精緻な記述で読者の信頼を得て、二〇世紀のガイドブックの基本形を作った。そして後者は、世界中に寓居するイギリス系知識人を主な書き手に招いてシリーズ化を進め、一八八〇年代には日本編である『中部および北部の日本旅行案内』を出版した。

マレーの日本編は数年おきに改訂され、その執筆にはイギリス外交官アーネスト・サトウや（注2）博言学者バジル・ホール・チェンバレン、宣教師ウォルター・ウェストンや文学者ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）などが参加し、英語圏の旅行者だけでなく日本人も読むガイドブックとして名声を博した。

たとえば飛騨と信州の山脈に「日本アルプス」という愛称を広めたのは、マレーの日本編にウェストンが記した紹介文によるという。また同書を読み、イギリスに興った山岳を「歩く」旅のかたちに刺激された志賀重昂は『日本風景論』（一八九四年）を発刊し、「歩く」旅を、明治期の日本へ導入した。

こうしてガイドブックを回路にした真似と追体験の［ X ］は、新しい旅行のかたちを広めると同時に、さまざまな文

化を醸成する推進力となってきた。真似と追体験の旅行は、常に退屈で貧しい体験だけを提供するとは限らない。それは後世へつながる、文化の土壌を生成する重要な実践の場にもなりうる。

文化とは、博物館や学校などで保存され、教えられる過去の知だけではない。様々な人々がそれを生き、日常生活において実践していくことで編み成され、伝えられていく社会的文脈の結晶体である。そうした文化を生き、編みなしていく主体になる実践の一つとして、いまも旅行は、貴重な価値を有すると考えられる。

脱文脈化する「買い・食い」中心の短期旅行だけでは、今後も日本の海外旅行は衰えていき、やがて海外旅行の歴史も失われてしまうだろう。歴史と文化が［ X ］する回路としてのガイドブックの可能性は、「歩く」旅の可能性と同じく、未だ尽くされていない。

（山口誠（やまぐちまこと）著『ニッポンの海外旅行――若者と観光メディアの50年史』に基づく）

（注）1　「名所図会」……旅行者などを対象に、土地の名所を絵入りで紹介する読みもの。

2　博言学者……言語学者の旧称。

問一　傍線部ア「『ガイドブック不要論』は、ガイドブックに対する批判で繰り返されてきた」とあるが、筆者はこの批判に対してどのように考えているか。その説明として不適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、ア。

① ガイドブックを頼りにする旅は、近代観光における特殊な旅ではなく、外国でも日本でも古くから行われていたものである。

② ガイドブックを頼りにする旅は、書かれている内容を追体験するだけのものではなく、ガイドブックが旅する人の眼鏡として機能することで、名所をよりよく理解することを可能にするものである。

③ ガイドブックを頼りにする旅は、現代の若者たちに限った体験ではなく、西行に憧れて旅立った芭蕉とも軌を一にする、古くから行われてきた旅のかたちである。

④ ガイドブックを頼りにする旅は、自由に歩くことをしない旅ではなく、先人とまったく異なる旅であり、自由に歩く主体的な旅である。

問二　空欄A～Cに入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄はイ。

	A	B	C
①	すると	とりわけ	その上で
②	ならば	なかでも	たしかに
③	あるいは	なるほど	しかし
④	むしろ	また	一方で

問三　傍線部イ「投稿記事を周縁化させていった」とはどういう意味か。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ウ。

① ガイドブックに掲載する記事の中で、投稿記事の役割を小さく扱うようになった。
② ガイドブックに掲載する記事の中で、投稿記事の内容を厳密に査定するようになった。
③ ガイドブックに掲載する記事の中で、投稿記事の新しい目的を検討するようになった。
④ ガイドブックに掲載する記事の中で、投稿記事の可能性を吟味するようになった。

問四　空欄 X に入る最も適切な言葉を、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答欄は、エ。

① 対立　② 前進　③ 構築　④ 生成　⑤ 循環

問五　本文の内容と合致するものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。ただし、順序は問わない。解答欄は、オ・カ。

① ガイドブックや紀行記の歴史は古く、ヨーロッパではキリスト教巡礼の旅のために『サンティヤーゴ巡礼案内書』が使われ、日本では一七〇二年に世に出た芭蕉の『おくのほそ道』が多くの人に影響を与えた。
② 先人の旅を真似て旅立つ人が、先人の「見る」ことを土台にして旅の行程について精緻な検証を重ねていくことで、旅行の歴史が繰り返され、人類の文化の一部を形成してきた。
③ 初期の「地球の歩き方」は、読者から寄せられる投稿を情報源として活用することで、情報がさらに新しい情報をもたらすというメディア循環を起こし、改訂するたびに多くの読者を得た。

④ ガイドブックは、情報の信頼性という社会的な責任が大きくなるにつれて、「買い・食い」中心の消費情報を提供するメディアから、「投稿が投稿を呼ぶ」メディアへと転換することで、新たな推進力を得るようになった。

⑤ ガイドブックは旅行者のための商業出版物でもあるが、先人の旅のかたちを伝える「買い・食い」中心の情報を取り除くことで、未来における第一級の史料にもなりうる。

⑥ ガイドブックによる体験型の旅行は、海外旅行の歴史を再生させ、後世へとつながる新しい文化を編みなし、社会的文脈の結晶体としての貴重な価値を生み出すと考えられる。

第3問　次の各問（問一～問六）を読んで、それぞれの指示に従って答えよ。

問一　次のA～Dの傍線部のカタカナと、各群の①～④の傍線部のカタカナが同じ漢字となるものを、それぞれ一つ選べ。解答欄は、A［ア］・B［イ］・C［ウ］・D［エ］。

A　ショウ進料理をいただく。
① 四回転ジャンプにセイ功する。
② 動物のセイ態を観察する。
③ セイ鋭をそろえて戦いに臨む。
④ セイ方形の面積を求める。

B　彼の意見に皆が異ク同音に反対する。
① 子どものいたずらに閉コウする。
② コウ妙な方法で金品をだまし取る。
③ 伝統コウ芸士に認定される。
④ 恥ずかしくて顔がコウ潮する。

C　薬局でゲ熱剤を買う。
① 取引を仲カイする。
② 建物をカイ築する。
③ カイ中電灯を手にする。
④ 難カイな問題に挑戦する。

D　紙数が尽きたのでカツ愛する。
① 飛行機がカツ走路に入る。
② 群雄カツ拠の時代になる。
③ 聴衆のカツ采を浴びる。
④ 株式市場がカツ況を呈する。

問二　次のA～Dの各群において、漢字の読み方（カタカナ表記）が正しくないものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A［オ］・B［カ］・C［キ］・D［ク］。

A
① 足袋（タビ）
② 干潟（ヒガタ）
③ 全幅（ゼンフク）
④ 悪寒（オカン）

B
① 悼（イタ）む
② 提（サ）げる
③ 賜（タマワ）る
④ 寂（スタ）れる

C
① 為替（カワセ）
② 遊説（ユウゼツ）
③ 偏重（ヘンチョウ）
④ 産着（ウブギ）

D
① 拘泥（コウデイ）
② 謁見（エッケン）
③ 普請（フシン）
④ 赤銅（セキドウ）

問三　次のA～Cの四字熟語の［　］に入る漢字一字と、四字熟語の意味の組み合わせとして最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A［ケ］・B［コ］・C［サ］。

A　内［　］外患

① 憂　内にも外にも心配事があること。
② 勇　心の中では勇ましいが、行動に移せないこと。
③ 雄　精神の雄々しさで困難を乗り越えること。
④ 幽　心にはむなしさ、身体には病があること。

B　五里□中

①　無　周りがみな敵となり孤立している状態。

②　夢　周りのものが目に入らないほど夢中になっている状態。

③　霧　どうするべきかの判断に迷い、方針や見込みが立たない状態。

④　務　私利私欲を捨てて任務にあたっている状態。

C　流言□語

①　悲　世間で言われている悲しい話題。

②　火　世間で言われている攻撃的な意見。

③　秘　世間で公然の秘密となっている話題。

④　飛　世間で言われている根も葉もないうわさ。

問四　次のA・Bにおいて、傍線部の漢字の意味が他と異なるものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A［シ］・B［ス］。

A　①　使用　②　用途　③　用法　④　作用

B　①　白雲　②　白目　③　白状　④　白紙

問五　次のA～Cのことわざの意味として最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A［セ］・B［ソ］・C［タ］。

A　天は自ら助くる者を助く

① 他人をあてにせず、自分で努力する人には幸運がやってくる。
② 人に親切にしておけば、いつかは自分にもよいことがめぐってくる。
③ 力の限りを尽くして、その結果はただ運命に任せる。
④ 余計な手出しをしなければ、災いは振りかからない。

B　天網恢恢（てんもうかいかい）疎にして漏らさず

① 意外なところから意外なものが出てくる。
② 悪いことをすれば、遅かれ早かれ天罰が下る。
③ 悪いことを除くために他の悪いことを用いる。
④ ちょっとしたこともみな深い縁によるものである。

C　後生畏るべし

① 知り尽くしている人に対していろいろと説明するのは愚かなことだ。
② 一つの災難を逃れたらまた新しい災難がやってくるので、気を付けなくてはならない。
③ 若者は勉強次第でどれだけ力を発揮するか計り知れないから、おそれるべきである。
④ 何事も最後まで気を緩めず努力しなければならない。

問六　次のA～Dの慣用句の□に入る最も適切な語を、それぞれ①～⑧の中から一つ選べ。ただし、同じものを繰り返し使用してはならない。解答欄は、A［チ］・B［ツ］・C［テ］・D［ト］。

A　かぶとを□　　B　猫を□　　C　錦（にしき）を□　　D　高（たか）を□

① くくる　② 飾る　③ 踏む　④ 脱ぐ　⑤ 買う　⑥ 売る　⑦ 正す　⑧ かぶる

〔国語の問題は以上です〕